

月夜

与謝野晶子

青空文庫

お幸かうの家は石津いしづむら村で一番の旧家でそして昔は大地主であつた
 為ために、明治の維新後に百姓が名みやうじ字こしらを拵こしらへる時にも、沢山の田
 と云いふ意味で太田おほたと附つけたと云はれて居ました。それだのに祖父
 の時に自身が社長をして居た晒木さらしもめん綿めんの会社の破綻はたんから一時に三
 分の二以上の財産を失ひ、それから続いてその祖父が亡くなり、
 代つて家長になつたお幸の父はまだやつと二十はたち歳になつたばかり
 の青年であつた為ため、番頭の悪手段にかゝつて財産を殆ほとんすべど総て他
 へ奪はれてしまつたのでした。喜き一郎らうと云つた其そのお幸の父も、お
 幸とお幸より三つ歳としした下の長男の久吉ひさきちがまだ幼少な時に肺病に
 罹かかつて二年余りも煩わづらつて歿なくなりました。其時分にもう太田の家

は石津川の向ひのいなり稲荷の森の横の今の所へ移つて来て居ました。

自家に所有権のあつた其沢山の田に取巻かれた三本松ぼんまつの丘の家

は、今では村のさらしどんや晒問屋の山仁やまにの別荘になつて居ることもお幸兄

第にはお伽とぎばなし噺の中の一つの事実くらゐにしか思はれないので

した。お幸は強い性質の子でした。丘の三本松はい好い形であると

なが眺めることはあつても、感情的な弱い涙をそれに注がうとはしま

せんでした。この春高等小学校を卒業してからお幸は母が少しば

かりの田畑をすることゝ手仕事で自分達たちを養つて居るのを心苦し

く思ひまして、自身の友であつた中村なかむらおつると云ふ人の親の家

へ通ひ女中になつて行つて居ました。中村の家も亦またさらしどんや晒問屋でし

た。お幸が中村家の手伝ひをするやうになつてからもう五月程に

なるのですがこの最近の四五日程苦しい思ひをさせられたことは
ありませんでした。お幸に親切な心を持つて居たおつるが九月の
新学期から大阪の某女学校へ入る事になつて其地の親戚の家へ行
つてしまつたことはお幸の爲めに少なからぬ打撃と云はねばなり
ません。中村家には意地の悪い女中が二人居ました。お幸が通ひ
で夜遅くなつてからの用をしないのが二人には不平でならないこ
とだつたのでせうが、おつるの居る間は目に見える程の迫害はし
ませんでした。中村家のお内儀かみさんは病身でしたから台所のこと
などは二人の女中が切つて廻まはして居るのでした。お幸のしなけれ
ばならない用事が無暗むやみに殖ふえて来て自然お内儀かみさんの部屋へ行く
ことが少くなると、其処そこへはまた外の用をどつさりお幸に押し附

けた女中の一人が行つて、お嬢様が見ていらつしやらないと思つて用事を疎かにすると云ふやうな告つげ口ぐちがされて居ました。家へ歸つて家の用事をする人に夜分の食事はさせないでもいゝと云ふやうな無茶な理屈を拵へて、下男と下女が一緒に食べる夜の食卓にお幸の席を作つてやらないやうなことを二人の女中は仕初めました。家へ歸つて更に食事をすると云ふことは母親に濟まないこととのやうにお幸は思はれるものですから、昼の食事を少し余計目に食べて我慢をしようとすればまた二人の意地悪女はそれも口くちぎ穢たなく罵のりました。今日で丁度五日の間お幸は日に二食で過ぐして来ました。

お幸は中村家の裏口を出てほつと息を吐つきました。

「何か別のことを考へなくては。」

お幸は思はずひとりごと 独言をしました。其処にはくつわむし 轡虫が沢山啼ないて居ました。前側は黒く続いた中村家の納屋で、あの向うが屋根より高く穂を上げた黍きびの畑はたになつて居ます。お幸は黍がこんなに大きくなつてからはつひ人かと思ふことが多くて、歩き馴なれた道も無気味でした。中村家の母家の陰になつて居た月は河原へ出ると目の醒さめるやうな光をお幸に浴びせかけました。水も砂原もきら／＼と銀色に光つて居ました。川下の方に村の眞実ほんたうの橋はあつて、お幸の今渡つて行くのは中村家の人と、此処ここへ出入する者の為ために懸けられてある細い細い板橋です。鳴り出した西念さいねん寺じの十時の鐘の第一音に弾はじき出されるやうにお幸は橋を渡つて

しまひました。一町程行くと右に文珠様もんじゆさまの堂があります。お堂は白い壁の堀へいで囲まれて居ます。白壁には名灸めいきうやら堺さかひの街の呉服屋やら雇人口入所やとひにんくちいれじよの広告やら何時いつでも貼はられて居るのです。

「おや、こんなものがある、」

お幸はその中に新しい貼紙はりがみの一つあるのを見出みいだしたのです。

それは大津おほつの郵便局で郵便配達見習を募集するものでした。

「学歴は小学校卒業程度の者だつて、十五歳以上の男子つて、まあそんなに小くてもいゝのかしら、日給は三十五銭。」

お幸はこんなことを口で言ひながら二三分間その貼紙の前で立つて居ました。

「男ぢやないから仕方がない。」

暫しばらくの間お幸は前よりも早足ですたくと道を歩いて居ました
 がまた何時の間にか足先に力の入らぬ歩きやうをするやうになり
 ました。魔の目のやうな秋の月はお幸のやうな常識に富んだ少女
 をも空想な頭にせずには置きませんでした。

「馬鹿ばかな。」

と思ひ出したやうに云つた後でもお幸の空想は大きく延びるばかり
 でした。お幸は髪を切つて男装をして大津の郵便局へ雇はれて
 行かうかとそんなことを思つて居るのです。母さんが承知をしな
 いかも知れない、かう思ふとお幸の目には、そつと髪を切らうと
 して居る所へ母親あははれが現て来て、あの小楠公せうなんこうの自殺いさを諫めたやう

なことを、母親が切きれ物ものを持つた手を抑へながら云ふやうな光景が見えて来ました。そして駄目だめだと思ひました。

「けれども」

お幸はまた最初の考へもどに戻つて、大津は此処から云へば三里も隔つて居ない所だけでも、泉せんなんせんぼく南泉北と郡が別れて居て村の人などはめつたに往来しない。何方どちらかと云へば海の仕事をすると工場の多い大津と云ふ街をこの村の人は異端視して居るのだ。だから私わたしが其処で男に化けて郵便脚夫をしても誰だれも気の附く人はあるまい。自分の働きで自分の食べて行くのは一緒でも今の女中奉公よりその方がどんなにいいか知れない。お金持の奴隷になる訓練を受けてそれが私の何にならう、私はもう断然と外の仕事に

移つてしまふのだ。さうしなければならぬのだ。私は工女の境
 遇がつまらないのであることは知つて居る。それにはなりたくな
 いと思つて居る。郵便脚夫は資本のある人に虐待される女工など、
 は違つて、お国の人と一緒になつて暮すのには是非廻さなければな
 らない一つの器械を廻すやうなことをするものなのだ。人間仲間
 の手助けを立派にするものなので、男装して男をとこな名にして私は早
 速郵便配達夫の見習ひに行かう。真ほんたう実にそれはいいことだとお
 幸は思ふのでした。

何時の間にかお幸はもう稲荷の森へ入つて来て居ました。虫の
 声が遠くなつて此処では梟ふくろふしきが頻りに啼ないて居ます。

「久ちやん。」

お幸はいつものやうに弟へ歸つた合図の声を掛けました。古い戸のがたがたと開けられる音がしました。

「姉さん。」

久吉は草履を突掛けてばたばたと外へ走つて来ました。

「姉さんに云ふことがあるよ。」

「どうしたの、母かあさん様は。」

お幸の胸は烈はげしく轟とどろきました。

「母さんのことぢやないよ。姉さんに云ふことがあるつて云つてゐるのぢやないの。」

「ぢやなあに。」

お幸は弟の肩へ手を掛けて優しく云ひました。

「姉さん今日はお芋が焼いてあるよ。」

「そんなこと。」

「だつて姉さんはお腹なかが空すいて居るのぢやないか、僕ぼく知つてるよ。」

久吉は恨めしさうでした。

「誰だれに聞いたの。」

「中村さんの音おとさく作さんに聞いたよ。今夜だつて食べさせないだらうつて。姉さんはもう我慢が出来まいつて。」

「あなた、母さんに話して、そのこと。」

「いいえ。けれどお芋は母さんに云つて焼いたのだからいいよ。」

「さう、ありがたうよ。久ちやん。」

「早く行かう姉さん。」

久吉に袖そでを引かれた時に、お幸は郵便配達夫になることを此処ここで弟と相談して見ようと思つて居たことを思ひ出しましたが、其そのまま儘なつかしい母の顔のある家の中に入つて行きました。

二人の母親のお近ちかは頼まれ物の筒袖つつそでの着物へ綿を入れた所でした。

「唯ただいま今、母かあさん様、こんな遅くまでよくまあお仕事。」

とお幸は口早に云ひました。

「お帰り。道は淋さびしかつたらうね。」

「月夜ですもの提ちやうちん灯は持たないでもいいし。」

久吉が暗い台所から持ち出して来た盆からは餓うゑたお幸に涙を

零こぼさせる程の力のある甘い匂におひが立つて居ました。お幸は弟の好意を其そのまま儘受けて物も云はずその焼芋を食べてしまひました。久吉はお茶の用意もしてくれました。

「私わたしが作ったものだもの、そんなに甘味おいしければ毎晩でもお食べよ。」

母親はじつと娘を見ながらかう云ひました。

「母かあさん様がお作りになつたからおいしいのよ。」

「なんの、おまへ自身で作つて御覧、もつとおいしいよ。」

お幸はこの時ふと母の労力を無駄むだづか使ひをさせたと云ふやうな濟まない気のすることを覚えしました。

「私わたしが持つて行く。」

皮の載つた盆を下げようとする久吉をかう留めてお幸は自身で台所へ行きました。

「母さん、暗くて見えませんけれど、何かして置く用が此処にありませんか。」

お幸はやや大きい声でかう云ひました。

「姉さんは元気が出たね。」

と久吉が云ひました。

「何も用はないよ。」

「母さん、母さん、僕は云つてしまひますよ。姉さんはね、中村さんで晩の御飯を食べさせて貰もらはないのだつて、他の女中ほかが意地わるをするのだつて、中村さんの音作ねんさくがすっかり僕に云つてくれ

ましたよ。母さん、もう姉さんを中村さんへ手伝ひに遣るのをよ
しなさいよ。」

弟の母に語るのをお幸はじつと台所で聞いて居ました。

「お幸や、さうなのかえ。」

「ええ。」

お幸は目に涙を溜めて灯の下へ出て来ました。お近は袖口をく
けかけて居た仕事をずつと向うへ押しやりました。

「何故黙つて居ました。自身の身体のことを自身で思はないでど
うするお幸。」

「はい。私は外の仕事の見つかるまでと思つて辛抱して居ました
けれど。」

「外の仕事つて。」

「私わたし今晚みち帰り途で大津の郵便局の郵便脚夫の見習に十五以上の男を募集すると云ふ貼はり紙がみを見ましたから、母さん、私は男の姿になつて髪なんかも切つて雇はれに行かうかしらと云ふやうなことも考へて来たのです。」

とお幸は思ひ切つて云ひました。

「おまへにそんな働きが出来ますか。」

「私わたしはよく歩きますし、丈夫ですし。」

「それだけの理由わけで郵便屋さんにならうと言ふの。」

「いゝえ。わたし私は世の中の手助けになる仕事ですからして見たいのです。」

「今の仕事は。」

「女中と云ふものが主人の家に大勢居ることは一層お金持を怠なまけ惰者ものにするだけのもので、世の中の為ためにはならないと私わたしは気が附きました。さうぢやないでせうか。」

「それはさうかも知れない。」

「私わたしは自分の出来ることの中で一番いい仕事をしなければならぬと思ひます。」

「十五になると大分理屈が解わかるね。」

お近はかう云つて久吉の方を見ました。

「姉さんはえらいや。僕なんかは学校を出たら百姓になるのが一番いいことだと思つて居た。」

と久吉は云ひました。

「お幸は百姓をどう思ふの。」

「まだそれは考へません。」

「それを考へないことがあるものですか。母かあさん様が若し間違つた

ことをして居たらおまへは注意をしてくれなければならぬぢや

ないの。母かあさん様のして居ることは百姓ですよ。私わたしは世の中へ迷惑

をかけないで暮して行くと云ふことが世の中のた為めだと思つて居

るよ。自身で食べる物を作つて私は自分やおまへ達の着物を織つ

て居ます。自分の出来ないものは仕事の賃金に代へて貰つて来る

と云ふこの暮しやうが私には先まづ一番間違ひのない暮しやうだと

思つて居るよ。」

お近のこの話をお幸は両手を膝ひざの上で組合せてうやうやしく聞いて居ましたが。顔を上げて、

「母さん、田や畑はもう少し余計に貸して貰へるのですか。」と言ひました。

「小作人が少くて困つて居るのですもの、貸して呉くれますとも。」

「髪を切つてお芝居のやうなことをするよりも私わたしのすることは、母かあさん様、あつたのですよ。」

「何のことですか。」

「野仕事です。百姓です。」

「さうかね。おまへが郵便局へ行きたいと云ふから、私わたしは男になつたりなどしないで、局長に逢あつて女の儘ままで、採用つかつて貰ふこと

を一生懸命ですればいいと思つて居たよ。私には百姓がいいと云つただけで、おまへを百姓にしようと思つて居るのぢやないよ。」とお近は言ひました。

「姉さん百姓におなりよ。三人で百姓をすると決めませうよ。」と久吉は云ふのでした。

「^{わたし}私は何でも出来ませんが百姓でも出来ません。」

「それではなつて見るがいいよ。ねえお幸、今日角造^{かくざう}さんに聞くと三本松の家を山仁^{やまに}さんはまた堺の商人へ売るさうだよ。私^{わたし}はそれがいいと思つて居るよ。おまへ達は知らないがそれはそれは無駄に広い家なんだからね。あれを真^{ほん}実^{たう}に人間仲間の役に立てようと思ふなら大勢の使ふものにしなければならぬのだからね。」

堺へ持つて行つて幾つかの家に分けて拵へたらいいだらうよ。併しかし建物に立派な宝物になる価値ねふみのあるものは別だけれど。」とお近は云ひました。

「さうなつたらあの丘へ自由に上あがれますね。いいなあ。」と久吉は云ひました。三人は幸福であることを感じて居ました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第六卷」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

1979（昭和54）年4月1日2刷発行

底本の親本：「少女の友」実業之日本社

1918（大正7）年10月

初出：「少女の友」実業之日本社

1918（大正7）年10月

入力：田中敬三

校正：鈴木厚司

2006年9月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

月夜

与謝野晶子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>